

社会科

岩山 直樹

1 社会科における深い学びをする子供とは

社会科における深い学びをする子供とは、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、社会的事象への理解を積み重ね、社会的事象の意味や関係性を捉え直す中で、よりよい社会の形成に参画する子供である。

(1) 「社会的事象の見方・考え方を働かせる」とは

子供は社会的事象と出会うと、位置や空間、時間、相互関係など*1に着目して社会的事象を捉える。そして、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりする考え方をを用いて問題解決を図っていく。

第6学年「天下統一を目指す～豊臣秀吉～」の学習では、年表をもとに秀吉の人物像(以下秀吉像)を捉え、戦国の世が政策によって統一されていく状態を説明する学習を行った。社会的事象との出会いの場では、年表を使って秀吉像について考えた。子供は、「下剋上の風潮」「武力で天下統一を目指す」といった時代背景のもと、事象や相互関係の視点である秀吉の働きに着目して、秀吉が将軍ではなく関白(政治家)として天下統一を目指したことに気付いた。そして、学習問題「なぜ秀吉は将軍にならず、関白(政治家)になったのだろうか」をつくり上げた。さらに、「秀吉の行った政策の内容や人々への影響を調べれば、秀吉が関白になった目的や秀吉の人物像がはっきりする」と、政策の意図と政策による社会の仕組みの変化を関連付けることで、解決の見通しや学習の進め方を考えた。

位置や空間的な広がり の視点	時期や時間の経過の 視点	事象や人々の相互関係 の視点
地理的位置、分布、地形、環境、気候、範囲、地域、構成、自然条件、社会条件、土地利用など	時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、向上、計画、持続可能性など	工夫、努力、願い、業績、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策、事業、役割、影響、多様性と共生(共に生きる)など

文部科学省『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必 要な方策等について(答申)』補足資料、2016年。

(2) 「社会的事象への理解を積み重ね、社会的事象の意味や関係性を捉え直す」とは

問題意識をもった子供は、社会的事象に進んで関わり、社会的事象に対する理解を深めていく。その中で、それまでの社会的事象への理解と新しい事実に対してズレを感じたり、社会的事象に対する友達と自分の意味付けとのズレに気付いたりすることで、問いをつくる。そして、見方・考え方を働かせて自分の考えの再構築を図り、社会的事象の意味や関係性を多角的に捉えていく。

先の事例で問題意識をもった子供は、資料を使って秀吉の政策について調べた。そして、為政者である秀吉の立場から、太閤検地や刀狩といった政策を理解し、身分制度が確立されていく社会の仕組みを捉え、自分なりの秀吉像をつくり上げていった。そこで、自分なりの秀吉像をもとに、政策の意図について話し合う場を設けた。ここで子供は、「一揆を防ぐ目的の刀狩」という自分の考えと鉄砲が取られていない事実とズレを感じ、「武器が残っていたら一揆が続いてしまうのに、なぜ秀吉は鉄砲を取らなかったのだろう」と、問いをつくった。子供は、話し合いを通して百姓が農業に専念できるようになった生活の変化に気づき、百姓の立場から、鉄砲は被害を防いで農業に専念するために必要な武器であったことを理解した。そして、百姓の立場から政策や社会の仕組みを捉え直すことで、自分の秀吉像を更新し、学習問題に対する新たな考えをつくった。

(3) 「よりよい社会の形成に参画*2する」とは

子供はこれまでとは異なった新たな視点や立場から社会的事象を捉えたり、吟味したりすることで、社会的事象を多角的に捉えていく。そして、社会生活についての総合的な理解を基に社会への関わり方を選択・判断していくことで、自分の関わり方を考えていく。

*2 歴史学習においては、学習を通して形成した概念的知識を、現代の社会的事象を捉える際に役立てることである。

先の事例で、子供は、武士や百姓といった複数の立場から秀吉の政策を捉えて戦国の世が政策によって統一された状態を理解した。その後、政策を評価しつつ、学んだことを現代に応用していくための話し合いの場「もし秀吉が総理大臣だったら、支持するかしないか」を設けた。子供は、武士や百姓の立場から政策の良し悪しを捉えるだけでなく、「現代だと刀狩は法律で国民から武器を取り上げるから、平和な世の中をつくるための良い政策だ」と、現代に生きる自分たちの立場からも政策を捉え、評価した。そして、「現代でも、国民が安心安全に生活するために、法律によって武器がない社会をつくるべきだ」と、公正に価値判断を行い、歴史的事象と現代を結びつけて学習を振り返った。

2 深い学びをする子供に育てるには

(1) 子供が問いをつくるには

子供は、学びがいを感じながら社会的事象と十分に関わり、自分の考えに自信をもった上で、事象や友達の考えとのズレを感じ、自ら問いをつくる。ここでは、次の3つの場において、それぞれ手立てを工夫する。

□ 社会的事象との出会いの場

- ① 子供の知的好奇心を喚起するよう、生活経験や既習事項で説明ができない社会的事象との出会いの場を設ける。
- ② 体験的な活動や資料、生活経験をもとに、学習問題について見通しをもったり予想したりする場を設ける。

□ 社会的事象との十分な関わり場

- ① 学習問題に対する自分の考えを明確にしていくことができるよう、社会的事象に関わる場を設ける。
- ② 資料を使つての調べ学習やインタビューといった情報収集するための多様な活動の場を設ける。
- ③ 子供一人一人がもつ、その子らしい見方・考え方を大切に、朱書きや声かけをすることで、自分の考えに自信をもつことができるようにする。

この手立てを通して、子供は、社会的事象に進んで関わり、根拠を伴った自分の考えをつくる。そして、自分の考えを伝えようと、友達と関わり始める。

□ 自ら問いをつくる場

- ① 社会的事象に対する自分の考えとズレを感じる新たな事実や友達の考えと出合う場を設ける。
- ② ズレに気付いた子供の姿を見取って、自分の考えと社会的事象や友達の考えとの異同を明確にする比較の場を設ける。既習事項との比較を行い、異同を明確にする。
- ③ 子供のつぶやきや発言を取り上げたり、問い返しや資料提示を行ったりして子供が本当に考えたい問いに洗練する。

このように手立てを工夫することで、子供は本気になって解決したい問いをつくる。

(2) 子供が自ら問いを解決していくには [重点]

本気になって解決したい問いをつかった子供は、解決を図るために、その子らしい見方・考え方で解決の糸口を求め、そして、友達の考えと出会い、考えを吟味し合う中で、解決を図るための新たな視点^{*3}に気付く。そうすることで、新たな視点から新たな考えをつくり始める。この時、次のように手立てを工夫する。

*3 課題解決に関わる条件を満たすと共に、本質に向かうために必要な視点。例 社会条件、持続性、役割等

- ① 子供がどのような様相で新たな視点に着目したり求めたりするか、またその視点は子供の生活経験や既習事項を生かせるものかを、単元構想や問題解決を図る子供の姿の見取りから想定する。
- ② 課題解決に関わる条件を絞った話合いの場を設けた上で、その子らしい見方・考え方を大切に、多様な考えが生まれるようにする。
- ③ 問い返しの発問や意図的指名、資料提示や追体験等を通して、子供に互いの考えの根拠や背景を見えるようにする。
- ④ ③の考えや背景を子供と一緒に共有したり、板書に整理したりすることで、新たな視点を明確にする。その際、誰のどのような発言を、どのようなタイミングで取り上げるか想定する。
- ⑤ 新たな視点をもとに、資料を活用したり、生活経験や既習事項を生かしたりして、新たな考えをつくる場を設ける。

このように手立てを工夫することで、子供は互いの考えを認めながら、自分の考えを再構築していく。そして、解決に向けて再び社会的事象に進んで関わり始める。

(3) 子供が自分の高まりを実感するには

子供は、社会的な問題と自分たちの関係性を見いだしたり、自らの変容を自覚したり他者から評価をもらったりすることで、自分の高まりを実感する。この時、次のように手立てを工夫する。

- ① 学習したことを振り返り、自らの変容を自覚できる場を設ける。
- ② 学習したことに対して、社会的な問題が自分事となる将来について考える場を設ける。
- ③ 学習したことを他者に広げ、学んだことに対して友達や家庭、地域といった他者から評価をもらう場を設ける。

このように手立てを工夫することで、子供は社会への関わり方を選択・判断し、自ら社会への関わり方を考えていく。